

弓八幡

世阿弥作

季は	地は	ワキ	後	前	前
		シテ		シテ	ワキ
二月	山城	高良明神	前に同じ	老翁	陪従

「御代も栄ゆく男山。／＼。名高き神に参らん。

「抑是は後宇多の院に仕へ奉る臣下なり。さても頃
は如月初卯八幡の御神事なり。郢曲のみぎんなれ
ば。陪従の参詣仕れとの宣旨を蒙り。唯今八幡山
に参詣仕り候。

道行
「四つの海。波しづかなる時なれや。／＼。八洲の
雲もをさまりて。げに九重の道すがら。往来の旅
もゆたかにて。廻る日影も南なる。八幡山にも着
きにけり。／＼。

詞
「急ぎ候ふほどに。八幡山に着きて候。心静かに神
拝を申さうするにて候。

シテ、ツレ一聲
「神祭る。日も如月の今日とてや。のどけき春の気
色かな。

ツレ
「花の都の空なれや。

二入
「雲もをさまり風もなし。

シテサシ
「君が代は千代に八千代にさざれ石の。巖となりて

苔のむす。

二人 「松の葉色も常盤山。緑の空ものどかにて。君安全に民あつく。関の戸ざしもさゝざりき。本よりも君を守りの神国に。わきて誓ひも澄める夜の。月かげろふの石清水。絶えぬ流れの末までも。生けるを放つ大悲の光。げにありがたき時代かな。

下歌 「神と君との道すぐにて。歩みをはこぶ此山の。

上歌 「松高き。枝もつらなる鳩の嶺。く。曇らぬ御

代は久方の。月の桂の男山。げにもさやけき影に来て。君万歳と祈るなる。神に歩みを運ぶなり。
く。

ワキ詞

「今日は当社の御神事とて。参詣の人々多き中に。是なる翁錦の袋に入れて持ちたるは弓と見えた
り。そもそも何より参詣の人ぞ。

シテ詞

「是は当社に年久しく仕へ申し。君安全と祈り申す者なり。又是に持ちたるは桑の弓なり。身の及び

なければいまだ奏聞申さず。只今御参詣を待ち得
申し。君へ捧物にて候。

ワキ 「ありがたしく。先々めでたき題目なり。さて其
弓を奏せよとは。私に思ひよりけるか。もし又当
社の御託宣か。分きて謂を申すべし。

シテ 「是は御言葉ともおぼえぬ物かな。今日御参詣を待
ち得申し。桑の弓を捧げ申す事。即ち是こそ神
慮なれ。

ツレ 「其上聞けば千早ぶる。

二入 「神の御代には桑の弓。蓬の矢にて世を治めしも。
直なる御代のためしなれ。よくく奏し給へとよ。

ワキ 「げにく是は泰平の。御代のしるしは顕はれたり。
まづ其弓を取り出だし。神前にて拝み申さばや。
シテ 「いやく弓を取り出だしては。何の御用のあるべ
きぞ。

ツレ 「昔し唐周の代を。治めし国のためしには。

シテ
「弓箭を包み干戈を納めし例を以て。

ツレ
「弓を袋に入れ。

シテ
「剣を箱に納むることぞ。

ツレ
「泰平の御代のしるしなれ。

二人
「それは周の代是は本朝。名にも扶桑の国を引けば。

地
「桑の弓。取るや蓬の八幡山。く。誓ひの海もゆ
たかにて。君は船。臣は瑞穂の国々も。残りなく
靡く草木の。恵みも色もあらたなる。御神託ぞめ
でたき。神託ぞめでたかりける。

ワキ詞
「桑の弓蓬の矢にて世を治めし謂猶々申し候へ。

地クリ
「そもそも弓箭を以て世を治めし始めと謂つば。
皇の御代始まりても。即ち当社の御神力なり。
シテサシ
「然るに神功皇后。三韓を鎮め給ひしより。

地
「同じく応神天皇の御聖運。御在位も久し国富み民
も。豊かに治まる天が下。今に絶えせぬ御貢とか
や。

「上雲上の月卿より。下万民に至るまで。楽しみの声尽きもせず。然りとは申せども。君を守りの御めぐみ。猶も深き故により。欽明天皇の御宇かとよ。豊前の国宇佐の郡。蓮臺寺の麓に。八幡宮とあらはれ。八重旗雲をしるべにて。洛陽の南の山高み。曇らぬ御代を守らんとて。石清水いさぎよき。靈社と現じ給へり。されば神功皇后も。異国退治の御為めに。九州四王寺の峰に於て。七箇りぐなりし神靈を。

シテ
「うつすや神代の跡すぐニ。

地
「今も道ある政事。あまねしや神籬の。をかたまの木の枝に。金の鈴を結びつけて。千早ぶる神遊び。七日七夜の御神拝。誠に天も納受し。地神も感応の海山。治まる御代に立ち帰り。国土を守り給ふ

なる。八幡三所の。神託ぞめでたかりける。

「げにや誓ひも影高き。く。此きさらぎの神祭。

かゝる神慮ぞありがたき。

シテ「ありがたき。千代の御声を松風の。更け行く月の夜神樂を。奏して君を祈らん。

地「祈る願ひも瑞籬の。久しき代より仕へてき。

シテ「我は誠は世々を経て。

地「今此年になるまでも。

シテ「生けるを放つ。

地「高良の神とは我なるが。此御代を守らんと。只今

こゝに来りたり。八幡大菩薩の。御神託ぞ疑ふな
とて。かき消すやうに失せにけり。く。(中入)

「都に帰り神勅を。く。悉く奏しあぐべしと。い

ワキ歌
「都に帰り神勅を。く。悉く奏しあぐべしと。い
へばお山も音楽の。聞えて異香薰ずなり。げにあ
らたなる奇特かな。く。

後ジテ「もとよりも人の國より我国。他の人よりも我人

と。誓ひの末も明らかき。真如実相の楓弓の。
八百万代に至るまで。動かず絶えず君守る。高良
の神とは我事なり。

地 「如月の。初卯の神楽おもしろや。

シテ 「歌へや歌へ日影さすまで。

地 「袖の白木綿返すぐも。千代の声々うたふとかや。

(神舞)

ロンギ地 「げにや末世といひながら。く。神の威光はいや

ましに。かくあらたなる御影向。拝むぞ尊かり
ける。

シテ 「君を守りの御めぐみ。本より定めある上に。殊に
此君の神徳。天下一統と守るなり。

地 「げにく。神代今の代の。しるしの箱の明らかに。

シテ 「此山上に宮居せし。

地 「神の昔は。

シテ 「久方の。

地
「月の桂の男山。さやけき影は所から。畜類鳥類。
鳩吹く松の風までも。皆神体とあらはれ。げに頼
もしき神心。示現大菩薩八幡の。神託ぞ豊かなり
ける。」。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション「謡曲評釈 第七輯」大和田建樹著